

No. 970

# 誓いに新たに

## —第10回全国戦没者追悼式—

あれから27年、盛夏の中にまたおとずれた8月15日、終戦記念日。

この日、東京日本武道館で、第10回全国戦没者追悼式が天皇、皇后両陛下をお迎えして行なわれました。会場には北海道から沖縄までの全国の遺族代表ら6千人が参列し、さきの大戦で国の尊い犠牲者になった310万人の霊を悼み、平和への誓いを新たにしました。

田中首相の式辞のあと、正午のサイレンと同時に一分間の黙とうをささげました。

つづいて天皇陛下のお言葉があり、最後に全国の遺族を代表して沖縄で夫を失った福島恵美子さん(62歳)は「あの悲しいしらせを受けた日から月日は矢のように過ぎ去りましたが、残された私たちは、うれしいにつけ悲しいにつけ在りし日のお姿お声を思い起こさない日はございませんでした」

亡き父、夫、子、兄弟に語りかける福島さんの言葉に会場のあちこちからすすり泣きの声ももれていました。

## —現代に生きる—

# 語り部

……祇園精舎の鐘の声、諸行無情の響あり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらわす……平家物語を琵琶の音に乗せて語る平曲、平曲を語れる人は今日本に四人しかいない。名古屋市に住む三品正保氏(52才)は生まれながらの盲目であった。4才の時から琴をならいはじめ、現在は琴の師匠として有名である。師は琴を習うかたわら平曲に取り組んで来た。平家盛衰の歴史を語り伝える平曲を後世に残すためである。また、師自身七五調の快よいリズムを持つ平曲が好きな為でもあった。……おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし、たけき者もついに滅びぬ……没落する貴族社会と興隆する武家の姿をとらえ、歴史の大きな展回を記した叙事文学。

750年前の魂は今日も語りの中に脈々として生き続ける。

長い修業を必要とし、苦しい訓練を用する平曲は若い人に人気がない。しかし、三品氏にはやっと一人の弟子が出来た。

今井勉君(12才)である。平曲の教授は全くの口承だけである。彼もまた盲目なのだ。今井君にとって、これからも長く苦しい修業の時が続くことだろう。しかし、たった一人の後継者、いつの日か美しい平家を語ることだろう。